書評

小木喬著「散逸物語の研究　平安・鎌倉時代編」

大槻修

平安末期・鎌倉時代物語の研究に際して、小木喬氏の前著「鎌倉時代物語の研究」（昭和三十六年十一月、東宝書房）は必読の書であり、筆者もかつて「在明の別の研究」（昭和四十四年十月、桜楓社）刊行につき、多大の学恩を忝くした。鎌倉時代物語の本質を詳細に分析され、その上にたって著者多年の深い学殖に裏打ちされた「在明の別」「浅茅が露」「風に紅葉（春日山）」「恋路ゆかしき大将」物語などの梗概・考説を拝読する時、まこと鋭い学者の眼光に、慨嘆するのみであった。加えて此度「散逸物語の研究―平安・鎌倉時代編」（昭和四十八年二月、笠間書院）を上梓され、二百を越える散逸物語の各々について精緻を極めた考察を学界に提供されたことは、松尾聡氏の名著「平安時代物語の研究―散佚物語四十六篇の形態復原に関する試論」（昭和三十年六月、東宝書房）と併せて、その恩恵はかり知れぬものがあり、よって散逸物語の研究は飛躍的に前進し、松尾氏の讃辞をもってすれば、本書の出現によって、平安・鎌倉期の物語文学史の空隙は、ほぼ完全に近く埋められ、書き改められるであろう。

本書は、第一章総説において、源氏物語・無名草子・風葉和歌集を軸とした物語史概説を行ない、ついで散逸物語復原に関する十一の資料を解説するが、加えて延々八百五十頁余にわたり、平安・鎌倉期の散逸物語二百四十一の各々について、時に従来の諸説を踏まえ、時に独創的な見解を打ち出された第二章各説こそ、まさに著者の独擅場というべく、樋口芳麻呂氏の言葉を借りれば、散逸物語研究大成とか散逸物語辞典と呼ぶのが妥当なような大書である。

さて筆者に関心ある二、三の問題点について本書の内容に触れてみたい。「浅茅が原の尚侍（内侍督）」について、著者は前著「鎌倉時代物語の研究」で「あさぢが露」との二書同一説に関する判定を今後に譲られた（同書一三四ページ）が、本書において、鈴木弘道氏の「一周忌の頃、尚侍蘇生」説批判を中心に、「浅茅原の尚

侍」に対する無名草子評言の、「あさぢが露」不適合を示され、よって二書は「別個の作品であるという松尾説に傾かざるを得ない」（本書一〇七ページ）と述べられた。たまたま「あさぢが露」に興味を持っていた筆者は、「あさぢが露と浅茅原の尚侍」（ビブリア、第五十一号）「あさぢが露と浅茅原の尚侍」続攷（同、第五十四号）を公けにして、現状のもとでは二書をむしろ別個の物語とみる方が穏当ではなかろうかと指摘した。特に筆者の「続攷」と著者の本書その項とは、発表こそ相前後したが、ほぼ同趣旨の論考となり、いささか意を強うしたことであった。ここに「あさぢが露」末尾の散欠部分は、一応やむを得ないとして、現存本文の限りにおいては、二書を別個とする考え方が、ほぼ固まったといえよう。

本書が出て五か月後、樋口芳麻呂氏の「「みかはにさける」物語について」（平安文学研究、第五十輯）が発表された。かつて発表された樋口氏の考察（「みかはにさける物語考」‖国語と国文学、昭和四十七年一月号。「物語後百番歌合配列考―三十六番から五十番までの歌の配列を中心に―」‖愛知教育大学研究報告第二十一輯）に対して、著者が本書で批判された（本書七八〇ページ）ところ、これはその反論に属する。両者の異論をここに詳細に検討する紙幅を持たず、いまはその大筋を紹介するにとどめるが、(イ)「あやしくも」の歌と物語との結び付きから、小木氏は「所たがえ」を御匣にかかわるものとみ、樋口氏は権中納言にかかわると主張される。(ロ)御匣に対して小木氏は身分の低い女と断定され、一方樋口氏は歌合四十二番右歌詞書における定家の書き方および物語後百番歌合の作者目録の表記などから、御匣を単に身分低い女性と押さえてよいかどうか問題が残るとされる。ひいては無名草子評言「御匣殿こそいみじくいとほしけれ」に関連する訳で、今後一層煮つめなければならない点であろう。(ハ)承香殿女御中納言と権中納言との間に、小木氏は、契りは結ばれなかったとし、樋口氏は「可能性としては考えられなくもない」とされる。こと散逸物語の復元は、樋口氏もいわれる通り、合理的な思考、想像力・学的厳密さの三者のかねあいが緊要であり、それはまた小木氏長年の変らざる態度であってみれば、浅学の筆者が介入する余地は至って狭いことであろうが、魅力ある論争として今後の発展が望まれるわけである。

なお同時に鈴木弘道氏の「月詣和歌集「ぬれぎぬと」の歌をめぐって」（平安文学研究、第五十輯）が出され、本書における著者の論すなわち「ぬれぎぬ」も、物語の題名のような感じを与える（本書六六二ページ）とする立場を紹介しながら、より一層「ぬれぎぬ」「忍びね」二通り説を補強しておられる。従来、月詣和歌集、巻五恋中、「ぬれぎぬと」の歌は、(イ)「ぬれぎぬ」「忍びね」二物語名を詠み込んだとする立場、(ロ)「ぬれぎぬ」を除外して「忍びね」

だけを認める立場―に分かれ、小木氏も本書において、用心深く(ロ)の立場にある寺本直彦氏の説も紹介しておられる。今後の展開が待たれるわけである。

「うら風にまがふ琴のこゑ」物語について本書は「筋よりも遊楽行事の場面描写を主とした物語らしい」（本書二九一ページ）とされたが、樋口氏の「浦風にまがふ琴の声」物語考（国語と国文学、昭和四十九年一月号）から反論が提出された。樋口氏は、限られた現存資料から筋を捕捉することが困難でも、それが即、作者武蔵が物語の筋を等閑に付していた証左とはならないと考え、本物語と源氏物語須磨・明石の巻との関連性を詳細に検討された。この物語については松尾聡氏・鈴木一雄氏・荻谷朴氏にもそれぞれ考察されるところがあり、諸説を踏まえながら樋口氏は、（説A）頼道の吹上の浜・和歌の浦遊覧を意識し、和歌の浦を主舞台に据えた物語として、この作品を位置づけられたが、加えてその論考末文で（説B）むしろ宇津保物語吹上の巻に、その構想・素材とも大きく依存しているかも知れぬと書き加えられた。

著者は本書「はしがき」で、「けれども「花さくら折る」物語のような場合、誰が風葉集の一首と題名から、ドンデン返しの本物語の内容を推察し得ようか。そういう点で、筆者は、風葉集に一、二首しか資料の無い作品については、臆病なほど臆測をさし控えた」（本書九ページ）と述べられたが、散逸物語の研究は、確かに事はさほど慎重を要するものであり、右に対する左の説をも常に考慮に入れるべく、「浦風にまがふ琴の声」もまた樋口氏の提案を受けて、さらに考察が深められてゆくことであろう。

本書における「忍び音」論は、前著「鎌倉時代物語の研究」所収そのままではあるが、五個条にわたって、現存本と古本（風葉集に採られたもの）とは相当異なった作品と断じておられる（本書四四七ページ）。一方、三谷栄一氏は、「現存本は原作と筋書においてほとんど変りなく、一歩も原作から脱線していない。梗概的に抄録したものであったらしい」（同氏「物語文学史論」）とされ、桑原博史氏もほぼ同意見のようである（同氏「中世物語の基礎的研究―資料と史的考察」）。筆者は、両者の説を詳細に検討した上、いわゆる第三系統に属する蓬左文庫蔵胡蝶茨本の飜刻を加えた三系統の校合結果をも参考にして、現存本「しのびね」は、単に古本の詞章を梗概風に簡略化したものとは考えられず、詞章・構想・主題等にかかわる幅広い面にわたって、相当程度の意図的改作がなされたものと判断し、「しのびね物語の改作態度」（甲南女子大学研究紀要、第十号）にまとめたが、いわゆる「改作」なる言葉の解釈をどのように理解すべきか、古本・現存本の関係について、さらに、より慎重な考究を必要としよう。

最後に「別本八重葎」。著者は前著で「時代は鎌倉期にはいるかと思われる」とされたが、本書では「全く特異な作品であるので、あるいは江戸時代の偽作ではないかとの疑いを持っている」（本書三〇ページ）と改められた。いわゆる散逸物語ではないが、妖怪談ともいうべき一風変った作品で、すでに桑原氏の詳細な論考がある。従来、源氏物語の亜流作品の一つに数えられ、桑原氏も、源氏物語蓬生巻の登場人物をそのまま借りてきて、源氏物語一巻のつもりで創作したものと考えられ、源氏続編と称するもの、つまり山路の露、雲隠六帖などと同類に考えるべきだとされた（同氏「中世物語の基礎的研究―資料と史的考察」）。一方、筆者は、むしろ源氏物語蓬生の巻の登場人物、情景描写などを巧みに利用しながら、女人の渇仰する「光源氏」を「狐」に仕立てるという冒険をあえて行ない、むしろ一個の短編小説として、姫君誘拐失敗談にまつわる妖怪・変化の物語を、積極的に創作しようとしたもの、という立場を述べた（「別本八重葎」の位置づけ＝平安文学研究、第五十一輯）が、その成立時期については、文章中にとりたてて特異な語句、語法も見当らず、雨月物語などを思わせる怪異小説のなかに、あるいは江戸期の戯作者を思わせるとしながらも、その判断を後考に俟つとした。小木氏からの私信にも強れられていたが、問題は富士谷成章の識語にあり、今後は、成章その人の分析をも加えて、果して「別本八重葎」が平安後期・鎌倉期の作品か、あるいは江戸時代の偽書か、早急に検討すべき命題であろう。なお著者は「松陰中納言」もまた後世の偽書ではないかと疑っておられる（本書二〇ページ）。併せて考察すべく、今後の進展が望まれる。

以上、かけ足の寸評に終り、恐縮の至りであるが、本書に提供された散逸物語二百四十一の作品は、今後、より一層の検討が加えられ、次第に補正され、補強されゆくであろうこと、常に小木氏のいわれる所であり、まさにこの種の研究の宿命ともいえよう。

昨秋、御夫妻にて明日香・京都・奈良を回られ、民宿での一夕、始めてお逢いした筆者は、松尾氏のいわれる「一見羽化登仙しそうな白髪瘦軀六十有六歳」の著者が、情熱をこめて散逸物語の意義を語られ、加えて新撰和歌集の研究や、「いはでしのぶ」物語の全訳を手がけておられる由をうかがい、そのたくましいエネルギーに圧倒される思いであった。確かに著者のいわれる通り、この種の考察には、歴史・物語・和歌・国語・風俗等それぞれ専門家を構成員とするグループ研究が望ましく、願わくば益々御健康にて、有難き先達者として、学会、研究会における強力な推進役になっていただき、もって後進を指導啓蒙して下さるよう祈って結びとしたい。

（昭和四十八年二月二十八日刊、A5判九三〇頁、九五〇〇円、笠間書院）